『シーボルト旧蔵日本植物図譜コレクション』中の宇田川榕菴の作品

髙橋　輝和

ロシアのサンクトペテルブルクにあるロシア科学アカデミーのコマロフ植物学研究所に江戸時代の日本植物図が1041点も保管されている。1994年には全点の縮小写真と341点の原寸カラー写真が『シーボルト旧蔵日本植物図譜コレクション』として丸善から出版された。

これらの植物図のほとんどはフィーリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796—1866年）が最初の日本滞在時（1823—29年）に集めて持ち帰ったものであり、その一部は彼の『日本植物誌』（Flora Japonica, ライデン1835—70年）の原図として利用されている。

シーボルトの没後、これらの植物図はその価値をよく知っていたロシアの植物学者カルル・イヴァノヴィッチ・マキシモヴィッチ（1827—91年）によってロシア科学アカデミーの資金で1869—70年にシーボルトの夫人から買い取られた。しかしマキシモヴィッチの没後はほとんど利用されることもなく長く静かに眠っていたものである。

シーボルトの集めた日本植物図の中には江戸在住の津山藩医で博物学者でもあった宇田川榕菴（1798—1846年）から贈られたものも入っている。しかしこれまで榕菴の作品として知られていたのは「ネムノキ」、「クサギ」、「ツチアケビ」の3点にすぎなかった（『シーボルト旧蔵・日本植物図譜展』図録〔以下では図録と称す〕1995年S.63。大場秀章「コマロフ植物研究所所蔵シーボルト植物画コレクション目録：序論」〔以下では大場と称す〕S.81では「クサギ」と「ツチアケビ」の2点とされていた）。

ところが現存する榕菴自身の記録『西聖氏録・下』（武田科学振興財団・杏雨書屋蔵）、『榕菴先生遺書（のこしがき）・巻一』（杏雨書屋蔵）や『宇田川榕菴雑録』（早稲田大学図書館蔵）によれば、少なくとも1825年（文政8年）の冬に4点、1827年3月15（文政10年2月18日）に11点、1828年（文政11年）の春と夏に17点の植物図を出島のシーボルトに送付していることが分かる（図版1、2、3、4）。さらに正確な年月日は不明だが、1827年か28年に植物図と思われるものを19点送った記録も存在する（図版5）。

榕菴がシーボルトに贈ったこれら全ての植物図の現存は今まで全く確認されていなかった。そこで改めて『シーボルト旧蔵日本植物図譜コレクション』（以下では丸善本と称す）の中の、作者が確認されていない図を精査してみた所、さらに榕菴の作品と特定できるものが見つかった。今までに確認されていたものと合わせて、徴証の種類によって5グループに分けて以下に示す。3桁の数字は丸善本の整理番号、（　）内はシーボルトが付していた整理番号である。

A．榕菴の朱印が押されている植物図

1．919（650）「ツチアケビ」（図版6）

図録 S. 63にカラー写真。右上の隅に榕菴の筆跡で「一」。左下の隅に凝った榕菴の朱印。その上に榕菴の筆跡で W. Jooan（Tchernaja S. 46のW. Jovanという読みは不正確。oをvのように書くのは榕菴の特徴）。

2．710（33）「クサギ」（図版7）

丸善本のカラー図版304、図録 S. 63、大場『江戸の植物学』口絵11にカラー写真。右上の隅に榕菴の筆跡で「三」。左下の隅に「ツチアケビ」と同じ榕菴の朱印。その上に榕菴の筆跡で W. Jooan。

「ツチアケビ」に「一」、「クサギ」に「三」と番号が付されていることから、少なくとも「二」の植物図もあったはずだが、それは現存せず、これらに関する榕菴側の送付記録も存在しない。

左下の隅に押されている凝った榕菴印は『重訂・属文錦嚢』（稿本1821年、杏雨書屋蔵）や『菩多尼訶経』（刊本1822年、埼玉県立文書館保管）に押されているのと同一印なので、この2点の植物図も同時期に作成されたと考えられる。

B．シーボルトの添え書きがある植物図

1．618（30）「ヤマボウシ」（図版8）

左下にシーボルトの筆跡で Archiater Japonic. Wudagawa Joan in urbe Jedo ad nat. delineavit（日本の医師、宇田川榕菴が江戸市で自然に従って描いた）。

2．156（142）「フサザクラ」（図版9）

右上の隅に榕菴の筆跡で「No. 1」。左の上端にシーボルトの筆跡で Hanc delineationem mihi communicavit Clar. Med. Japonicus Woedagawa Jöan in urbe Caesaria Jedo（この図は私に日本の著名な医師、宇田川榕菴が帝都の江戸で提供してくれた）。

Ohba/Tchernaja/Pankratova S. 103 や大場 S. 81が Hanc を Itane と読んでいるのは間違いである。シーボルトの添え書きの意味を大場 S. 81が「皇都江戸で日本の著名な医者宇田川榕菴がこの植物画について私に情報を伝えた」と訳しているのも誤りである。communicavit を presented とか had given と解している Tchernaja S. 45, 47 の方が正しい。動詞 communicare はここでは人物の与格形＋事物の対格形と共に「ある人にある物を与える」という意味で用いられている（Hermann Menge : Langenscheidts Großwörterbuch Lateinisch. Teil I : Lateinisch—Deutsch 1984, S. 143 参照）。

さらに大場 S. 82は「実際問題として、宇田川をはじめ当時の日本人がこのフサザクラにみるような植物画を描いたとは考えられない」と述べているが、榕菴自筆の『植物図』（1823年開業。天理図書館蔵。『洋学者稿本集』天理大学出版部1986年に全ページのカラー写真）にはもっと素晴らしい植物の写生図や解剖図が描かれており、それを見て大いに感心したシーボルトが表紙の下方

に Deze ontledkunde maakt UEd. veel eere（この解剖学は貴方に多大な栄誉をなす）という賛辞をオランダ語で書き付けて署名している程である。

3．440（680）「ネムノキ」（図版10）

図録 S. 63にカラー写真。右上の隅に榕菴の筆跡で「no. 5」。実の図の下の Vruchtbeginzel（＝-beginsel）（子房）も榕菴の筆跡（n と区別するために u を ú と書くのが彼の特徴）。台紙にはシーボルトの筆跡で communicavit ill. W. Joan, floruit in urbe Jedo（卓越した宇田川榕菴が提供してくれた。江戸市では花盛りであった）。

図録 S. 63で「他の2点（＝「ツチアケビ」と「クサギ」）から見てすべて榕菴が描いたとは考え難い」と言われているが、この「ネムノキ」はシーボルトの江戸滞在時に描かれたので、「ツチアケビ」や「クサギ」の後の数年間に榕菴の技術が向上したことを認めなければならない。

シーボルトの添え書きのある、これら3点の植物図に関しても榕菴側の記録はこれまでの所、見つかっていない。

C．榕菴側に送付記録がある植物図

1．690（230）「サクララン」（図版11）

右上の隅に榕菴の筆跡のNが見えるが、右端の数字は写真に写っていない。各図に榕菴の筆跡で Vergrooting（拡大）、Natuurlijk grootte（原寸大）、Kelk（萼）、Vruchtbeginzel（＝-beginsel）（子房）。

『榕菴先生遺書・巻一』の中に「シーボ（ルト）ヘブリーフ（＝手紙）。二月十八日（＝1827年3月15日）出、写真図ヲ送ル書状ナリ」として手紙の控えが残っている（図版2）：hiernevens zend ik uEd. 11 vel van de naar 't leven afteekening der japansche planten als（これと共に私は貴方に次のような日本植物の実写図を11枚お送りします）。これの2番目は「サクラランノ花」となっているので、名前も図の様子も一致する。

2．165（27）「レンゲショウマ」（図版12）

右上の隅に榕菴の筆跡で「N 5」、図の下に twee wijfig（雌性2本）、viel（＝vier）mannig（雄性4本）。

1827年3月15日の送付記録（図版2）では5番目は「レンゲショウマ」であったので、番号も名前も合致する。

3．107（556）「ツクバネ」（図版13）

丸善本のカラー図版308、大場『江戸の植物学』口絵5にカラー写真。右上の隅に榕菴の筆跡で「N. 17」。

この植物図は拓本に着色されたものであり、これまでは「おそらく水谷豊文（＝助六）の手になるものと思われる」（大場『江戸の植物学』口絵5）とされていた。図の右下に鉛筆で Midz Sug

（＝Midzutani Sukeroku）と書き込まれていることがその根拠であったが、しかしこの書き込みはシーボルトの筆跡ではなく、マキシモヴィッチの筆跡なので、この植物図の作成者を特定する根拠にはなり得ない。このことは、「ユキモチソウ」（903、カラー図版276、図録 S. 62、大場『江戸の植物学』口絵７）の左下にあるシーボルト自身のの添え書き：delineavit et communicavit Bot. ill. Midsutane Sukerok（卓越した植物学者、水谷助六が描いて、提供してくれた）と比べれば、筆跡も表記法も異なっているので、疑問の余地はあり得ない。

この「ツクバネ」図が宇田川榕菴の作品であることは、『榕菴先生遺書・巻一』の中に「文政十一（＝1828年）春、献上ノ時、シーボ（ルト）ニ贈る目（もく）」という記録（図版３）があって、その17番目の画が「ツクバ子」となっていることからも明らかである。さらに『宇田川榕菴雑録』には「西書一往」として、その際にオランダ語でしたためた手紙の控えが残されている。その冒頭は次の通りである。

> met bijzondere genoegen heb ik uEd. brief ontvangen, en zie daar in uEd. verzoeking van zeldzaame planten, bij deezen zend ik uEd. 8 afteekening, inzonderheid N 16, 17, 18, 19 is de zeldzaamste, maar met de wederkeering van de hofreis zal ik nog meerder zenden. ...（特別な満足をもって私は貴方の手紙を受け取りました。そしてその中で貴方が珍奇な植物を求めておられるのが私には分かります。それらと共に私は貴方に写生図を８枚お送りします。特に16、17、18、19番は極めて珍奇なものです。しかし私は参府旅行から戻るとさらに幾つかお送りするでしょう。…）

この記録の中でも「N 17. tskoebane」（図版４）となっていて、番号も書体も「ツクバネ」図の右上の隅の「N. 17」と完全に一致する。この場合に榕菴が「画」とか afteekening（写生図）と呼ぶのは着色した拓本のことである。

Tchernaja S. 44 によればコマロフ植物学研究所にある「シーボルト旧蔵日本植物図譜コレクション」の古いカバーの一つにシーボルトによって赤鉛筆で Naturabdrücke vom Jap. Botaniker W. Joan Jedo（日本の植物学者、江戸の宇田川榕菴による拓本〔複数形〕）と書かれている。既にこの記載が榕菴による拓本図の混じっていることを示していた。

同様の手法で作られた植物拓本図は榕菴の『植物図』（天理図書館蔵）や『写生図』（国会図書館蔵）、さらにはライデン大学の図書館にある榕菴の『本草推写』（『植学啓原＝宇田川榕菴』講談社1980年 S. xxiii にカラー写真）にも見られる。

４．922（553）「ムカゴソウ」（図版14）

この図も「ツクバネ」と同じく着色された拓本。右上の隅に榕菴の筆跡で「N. 22」、その下に met 2 gedroogde（２点の乾燥させたものと共に）。

榕菴側の1828年の記録（図版３）で「廿二 ツバメオモト」となっているのがこれに対応する。名前が合わないのは、榕菴が間違えたか、あるいは当時、ツバメオモトとも呼ばれることがあっ

たのかも知れない。

met 2 gedroogde（Ohba/Tchernaja/Pankratova S. 289の met z geroogde という読みは間違い）とある榕菴の添え書きは、同時に送った腊（せき）（＝押し葉）の内の「卅九 ツハ子オモト」（図版3）を指している。

5．443（43）「ハカマカヅラ」（図版15）

右上の隅に榕菴の筆跡のNが見えるが、右端の数字は写真に写っていない。

この図は1827年か28年の送付記録（図版5）の中の「19　ハカマカヅラ」に対応する。

D．榕菴の筆跡がある植物図

1．209（394）「ムベ」（図版16）

右上の隅に榕菴の筆跡で「No 7」。

2．805（112）「ハラン」（図版17）

右上の隅に榕菴の筆跡で「No 12」。

3．924（649）「ショウキラン」（図版18）

丸善本のカラー図版328、図録 S. 73にカラー写真。右上の隅に榕菴の筆跡で「N. 19」。

この植物図はこれまで、シーボルトが出島に呼び寄せた画家のフィレネーフェの作品ではないかと考えられていた。描き方がヨーロッパ風に見えるためである。図上には「N. 19」以外に確かな手掛かりはなく、榕菴側の送付記録もないが、マキシモヴィッチの証言が有力な手掛かりになった。彼は1860―64年の日本滞在中に日本人の協力者が採取したショウキランに Yoania japonica（ヨーアニア・ヤポニカ）という学名をつけて1872年に Bulletin de l'Académie impériale des sciences de St. -Pétersbourg（サンクトペテルブルク帝国科学アカデミー会報）18号に発表した。その命名の由来を彼は次のように述べている。

> Dicavi in honorem botanici japonici peritissimi et medici yedoensis praeclari Wudogawa (＝Wudagawa) Yoan, cujus manu confecta icon pulchra hujus plantae exstat inter icones ineditas Sieboldianas, quique herbarium Sieboldi olim permultis speciebus rarissimis adauxit.（極めて熟練した日本の植物学者にして有名な江戸の医師、宇田川榕菴に敬意を表して私は命名した。彼の手で作成された、この植物の美しい図がシーボルトの未発表図の中にあり、また彼はシーボルトの植物標本集をかつて非常に多数の極めて希少な種（しゅ）でもって増やしたからである）

ここで言われている「シーボルトの未発表図」とは「シーボルト旧蔵日本植物図譜コレクション」のことを指しているに違いない。この中にあるショウキランの図は1枚だけなので、これが榕菴の作品と考えられる。しかしながらマキシモヴィッチはこの「ショウキラン」図を榕菴の作品であるとする根拠を示していない。推測であるが、当時、彼の手元にはシーボルトが作った作

成者リストがあったのか、あるいは売買交渉の過程でシーボルト夫人から情報を得ていたのかも知れない。

4．508（557）「ニガキ」（図版19）

図録 S. 62にカラー写真。着色された拓本。左上に榕菴の筆跡で Vier mannige en Een wijfige（雄性4本と雌性1本）。

この図の右下の隅に Midz Sug（＝Midzutani Sukeroku）と書かれていることから、水谷豊文（＝助六）の作品ではないかと考えられていた。しかし「ツクバネ」図の場合と同様、この筆跡はシーボルトのものではないので、手掛かりにはなり得ない。

5．444（44）「ハカマカヅラ」（図版20）

各図に榕菴の筆跡で1から9までの番号。

この植物図は443（43）「ハカマカヅラ」（図版15）と同様であるが、これには解説のための番号が付されているので、1825年の送付記録（図版1）にある「四種の図説」の内の「ハカマカヅラ」のことであると思われる。

E．シーボルト番号551—558が付されている植物図

1．914（551）「キンラン」（図版21）

2．923（552）「トンボソウ」（図版22）

3．915（554）「コアツモリソウ」（図版23）

4．617（555）「ミズキ」（図版24）

5．362（558）「バイカウツギ」（図版25）

既に榕菴の作品として確認できた922（553）「ムカゴソウ」（図版14）、107（556）「ツクバネ」（図版13）、508（557）「ニガキ」（図版19）と同様、これらも着色された拓本である。

「ツクバネ」の所で述べたように、コマロフ植物学研究所にある「シーボルト旧蔵日本植物図譜コレクション」の古いカバーの一つにはシーボルトによって赤鉛筆で Naturabdrücke vom Jap. Botaniker W. Joan Jedo（日本の植物学者、江戸の宇田川榕菴による拓本〔複数形〕）と書かれている。「シーボルト旧蔵日本植物図譜コレクション」の中には全部で9点の拓本がある。その内の75「ネコシデ」だけは墨汁の拓本で、シーボルト番号の85もかけ離れているが、他の8点は551番から558番であり、技法も全く同じである。そしてその内の3点は榕菴の作品と確認できたので、残りの5点も榕菴のものであると考えざるを得ない。これら8点の着色拓本図の右下に Midz Sug とか Midz Sugerok と書き込まれていることから、これまでは水谷助六が作成したものであるとみなされてきたが、この書き込みはシーボルトの筆跡ではなくて、明らかにマキシモヴィッチの筆跡なので、これを手掛かりにすることはできない。マキシモヴィッチのラテン文字の筆跡は、「札幌博物学会会報」1，1895の巻頭にある彼の肖像写真の下の署名にも見ることができる（図版26）。

以上のように、これまで日本において榕菴の作品として知られていた3点を含めて、合計20点の植物図を私は彼の作品であると特定した。しかしコマロフ植物学研究所の主任司書 T. A. チェルナヤは榕菴の作品が12点あると指摘していた（Tchernaja S. 46)。彼女の言う12点は、私が上に示した20点の中から着色拓本図の8点を除いたものである。彼女の鑑定によれば、榕菴の朱印が押されている2点以外の10点は描写法や色使い、紙の種類が共通しているとのことである。さらに付け加えると、これらの紙のサイズはほぼ一定している。これらの内の7点には右上の隅に「Nというサインのある1から19までの番号」が付けられていることは指摘されていたが、それが榕菴の筆跡であることに誰も気付いていなかった。

最後に、榕菴がシーボルトに贈った自作の植物図の総体をまとめてみる。「シーボルト旧蔵日本植物図譜コレクション」の中にあることが確認できたものには下線と番号を付けてある。

Ⅰ．榕菴側に送付記録がある植物図

a．1825年冬

1．ハカマカヅラ（444）　2．ツクバ子

3．シキミ　4．千鳥ノ木

b．1827年3月15日

1．シラキ　2．サクララン（690）

3．ダウダンツツジ　4．蕘花（ぎょうか）

5．レンゲシヤウマ（165）　6．カラクサ

7．ワンジュ　8．芡（けん）（オニブキ）

9．吉祥草（クワンヲンサウ）　10．漢種ノ五味子（ごみし）

11．オランダギセル

c．1828年春

12．大白微　13．土参（どじん）（山人参）

14．土参（どじん）（山人参）　15．フスマウツギ（白ウツギ）

16．無名　17．ツクバ子（107）

18．小アツモリ　19．山トウガラシ

d．1828年夏

20．乙女草（タキナ）　21．銀ラン

22．ツバメオモト（922ムカゴソウ）　23．山カヘデ

24．水鼈（すいべつ）（＝トチカガミ）　25．ナベワリフ子

26．無名　27．楓

28．御ゼンタチバナ

e．1827/28年

1．キツ子ノオ　　2．小シホガマ
3．大シホガマ　　4．ノグルミ
5．シユルクフイ　　6．エゾカハラボウコノルイ
7．日光ゴゼンタチバナ　　8．エゾハゴロモサウ
9．テンノムメ　　10．丁子菊
11．長葉シホデ　　12．一リンサウ
13．白根アフヒ　　14．車葉王藤
15．エゾ産フジバカマノルイ　　16．イヌグス
17．モクケンヂ　　18．チドリノキ
19．ハカマカヅラ（443）

II．榕菴側に送付記録がない植物図

a．番号が漢数字

1．ツチアケビ（919）　　2は不明
3．クサギ（710）

b．番号の前にNo/N.

1．フサザクラ（156）　　2から6まで不明
7．ムベ（209）　　8から11まで不明
12．ハラン（805）　　13から18まで不明
19．ショウキラン（924）

c．番号の前に no.

1から4まで不明　　5．ネムノキ（440）

d．榕菴の番号なし

1．ニガキ（508）　　2．ヤマボウシ（618）
3．キンラン（914）　　4．トンボソウ（923）
5．コアツモリソウ（915）　　6．ミズキ（617）
7．バイカウツギ（362）

榕菴側に送付記録がある植物図は51点の内の6点であり、榕菴側に送付記録がない植物図は34点の内の14点である。従って合計すると、85点の内の20点が現存していることになる。残りの植物図はまだヨーロッパのどこかにあるに違いない。例えばライデン大学の図書館にある榕菴の『本草写真』の中の「キチジョウソウ」（『植学啓原＝宇田川榕菴』S. xxiv 図6）は1827年3月15日に送った「N 9 吉祥草」の可能性がある。

Tchernaja S. 45—47 によれば、榕菴は自分の作品以外に、無名の日本人画家の作品を136点、

「くによし」の作品を16点シーボルトに贈呈していると言われる。しかしながら「くによし」と読まれた落款の文字は「國寧（くにやす）」である。これは桂川甫賢（国寧）の名前なので、後日改めて検討する。

参考文献

Siebold's Florilegium of Japanese Plants『シーボルト旧蔵日本植物図譜コレクション』（木村陽二郎、ウラジミール・I. グルボフ、大場秀章監修）丸善1994年。

『シーボルト旧蔵・日本植物図譜展』図録（大場秀章監修）1995年。

大場秀章『江戸の植物学』東京大学出版会1997年。

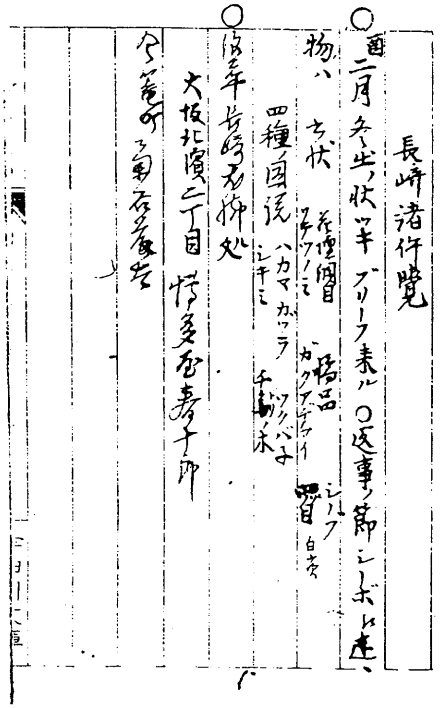
大場秀章「コマロフ植物研究所所蔵シーボルト植物画コレクション目録：序論」上記 Siebold's Florilegium of Japanese Plants に所収。

Ohba, Hideaki/T. A. Tchernaja/G. N. Pankratova : Catalogue of the Siebold Collection of Botanical Illustrations in St. Petersburg. 上記 Siebold's Florilegium of Japanese Plants に所収。

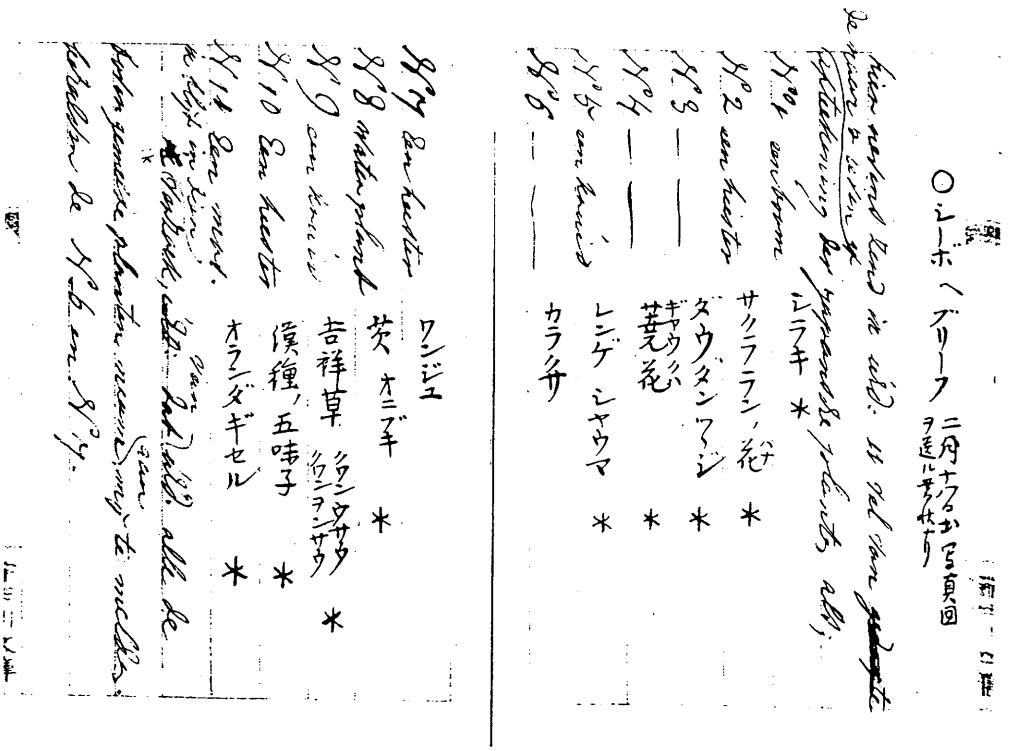
Tchernaja, Tamara A. : Philipp Franz von Siebold's *Flora japonica delineationibus ac picturis illustrata* and its history in notes and inscriptions on the illustrations. 上記 Siebold's Florilegium of Japanese Plants に所収。

髙橋輝和「ロシアに眠っていた日本植物図 — 続・シーボルトと宇田川榕菴」長崎新聞2000年12月17日。

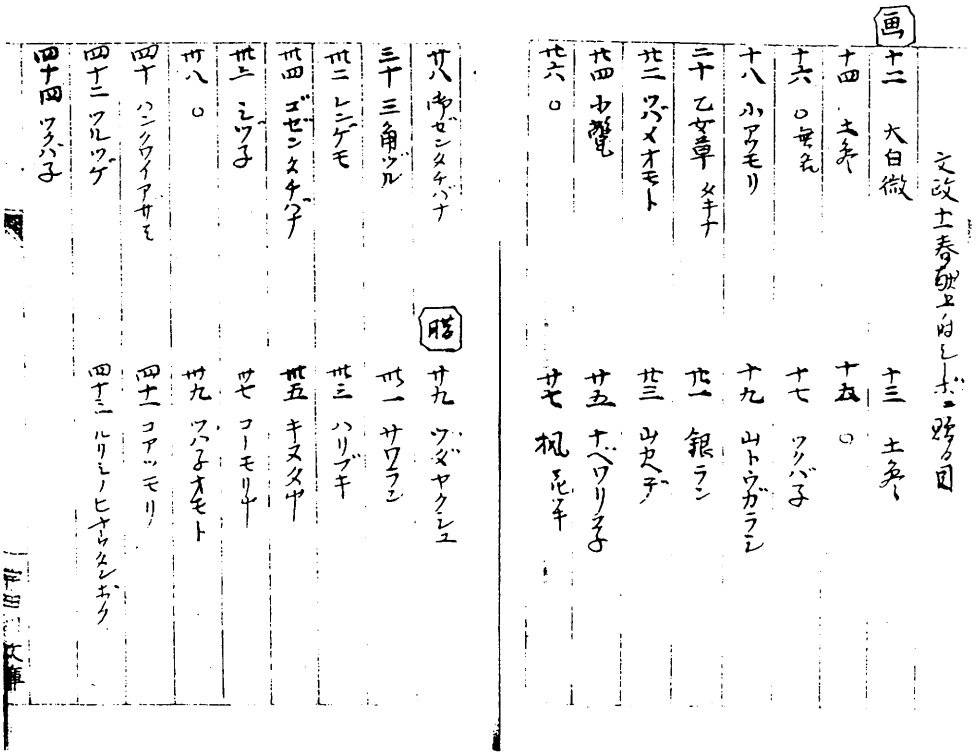
髙橋輝和「シーボルト旧蔵のツクバネ図」津山洋学資料館・友の会だより No. 38, 2001年 2 月。



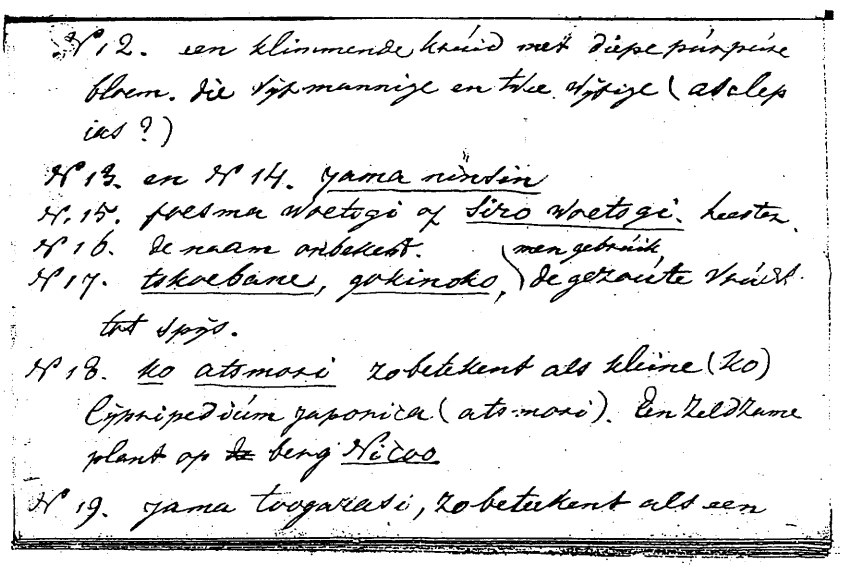
図版１．『西聖氏録・下』（杏雨書屋蔵）



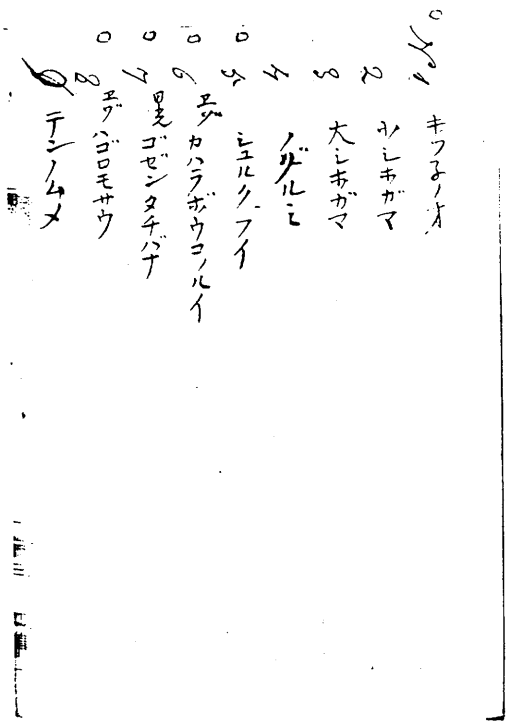
図版２．『榕菴先生遺書・巻一』（杏雨書屋蔵）



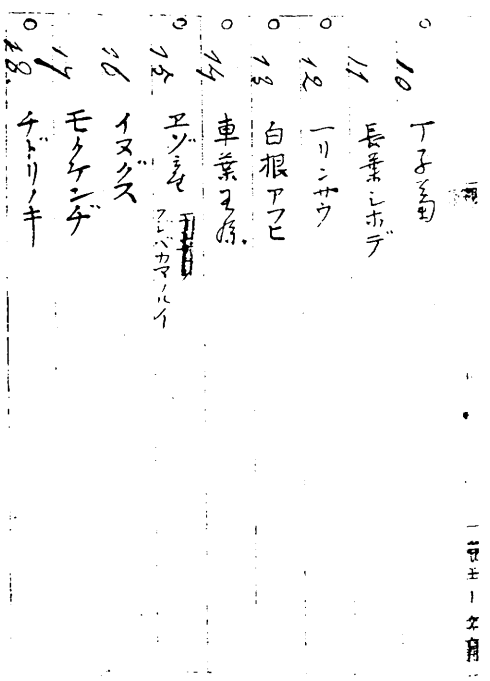
図版 3．『榕菴先生遺書・巻一』（杏雨書屋蔵）



図版 4．『宇田川榕菴雑録』（早稲田大学図書館蔵）

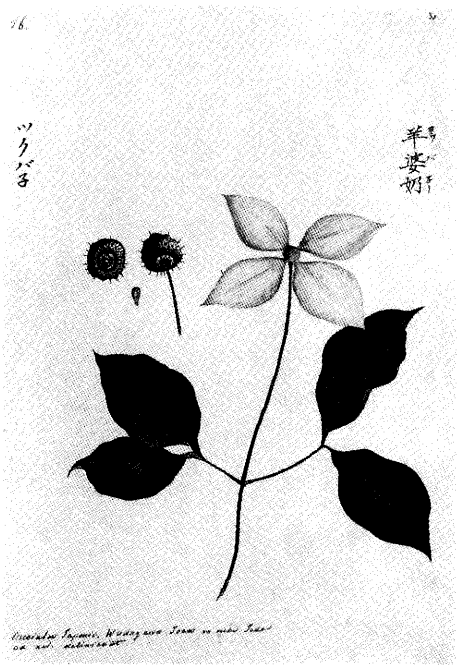


図版５．『榕菴先生遺書・巻一』（杏雨書屋蔵）

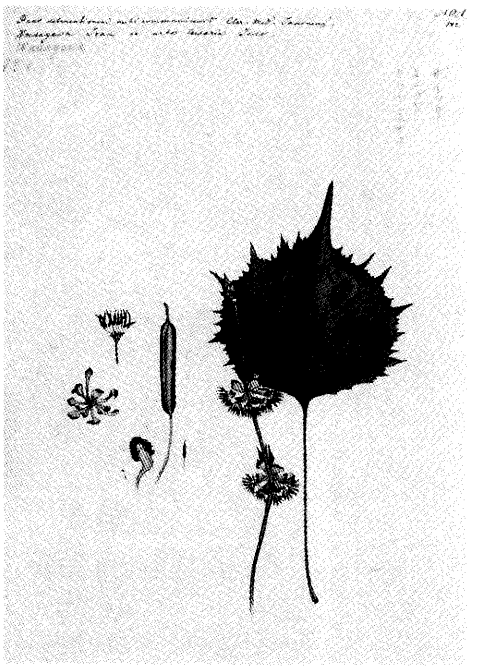


図版6．「ツチアケビ」『シーボルト旧蔵日本植物図譜コレクション』919（以下同じ）（24.2×30.5cm）

図版7．「クサギ」710（24.0×31.2cm）

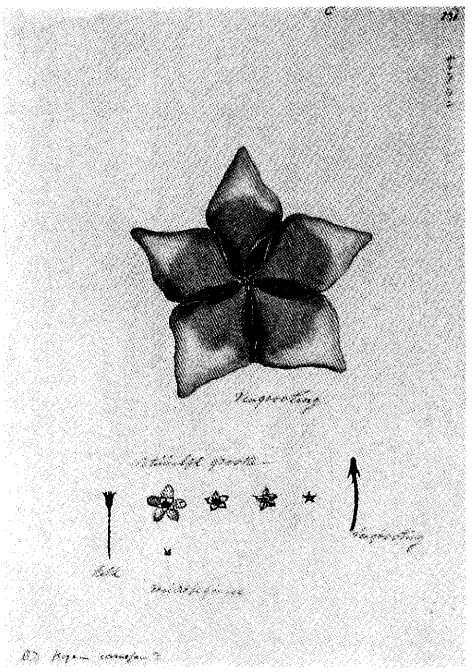


図版8．「ヤマボウシ」618（23.4×33.3cm）

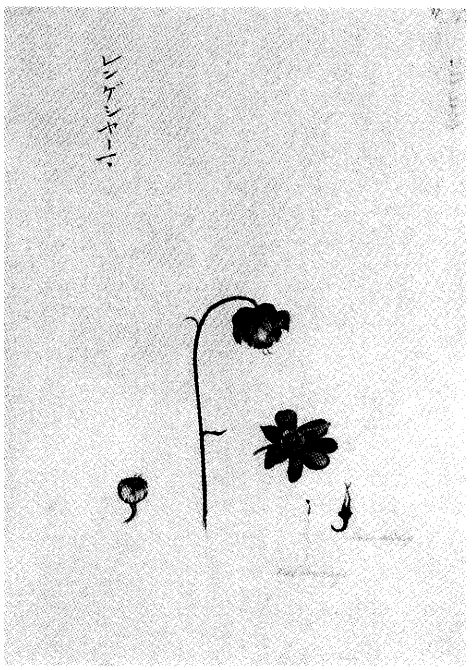


図版9．「フサザクラ」156（23.7×33.2cm）

図版10.「ネムノキ」440（24.1×33.6cm）

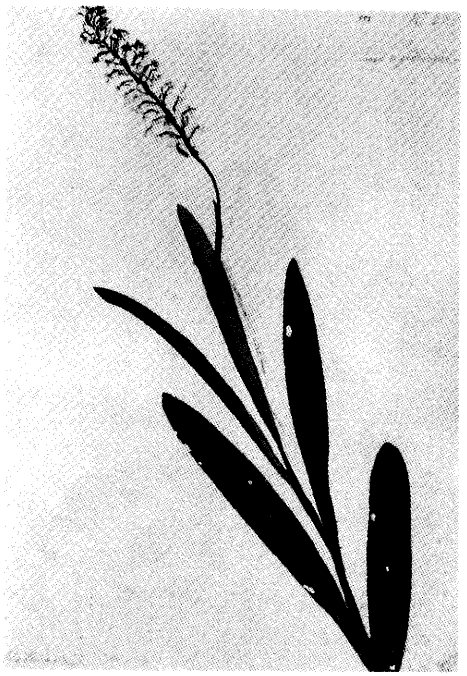


図版11.「サクララン」690（23.4×32.9cm）

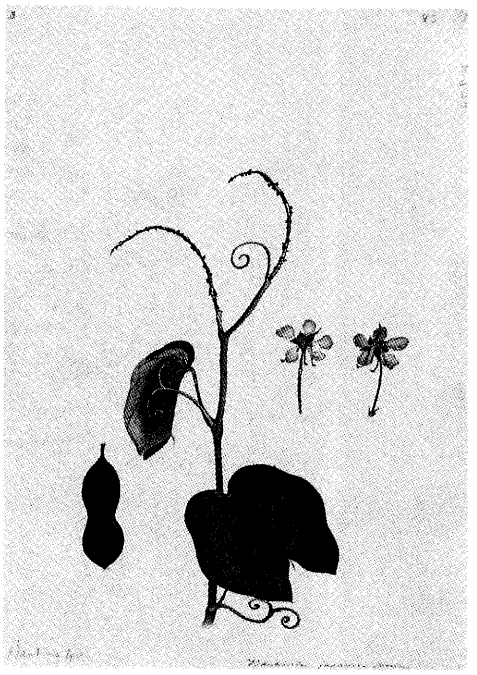


図版12.「レンゲショウマ」165（24.5×33.7cm）

図版13.「ツクバネ」107（22.7×32.8cm）

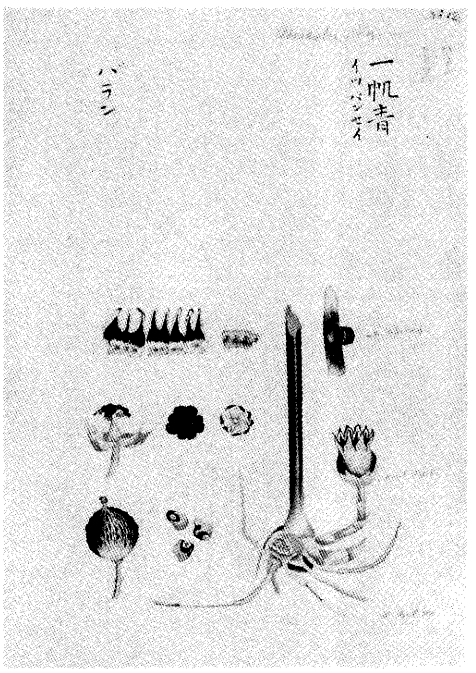


図版14.「ムカゴソウ」922（23.8×33.7cm）

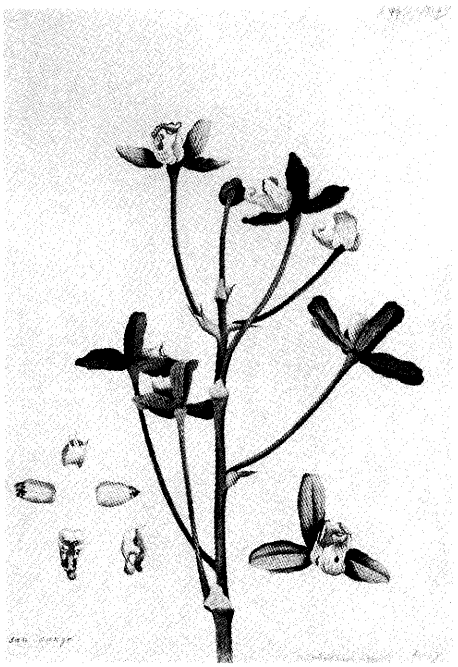


図版15.「ハカマカヅラ」443（24.0×33.1cm）

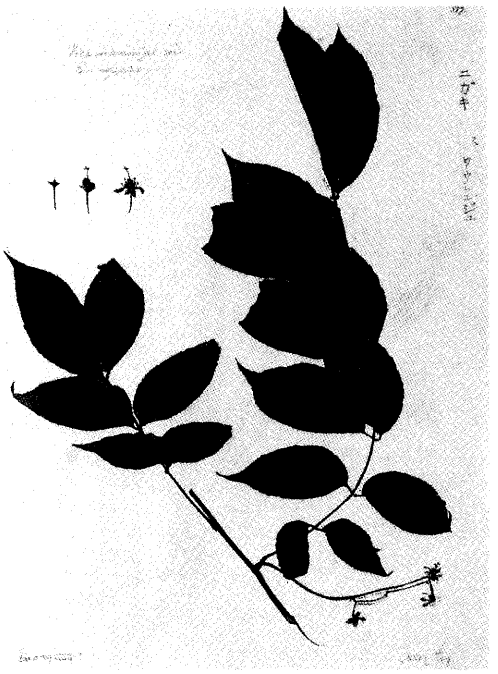
図版16.「ムベ」209（24.0×33.3cm）



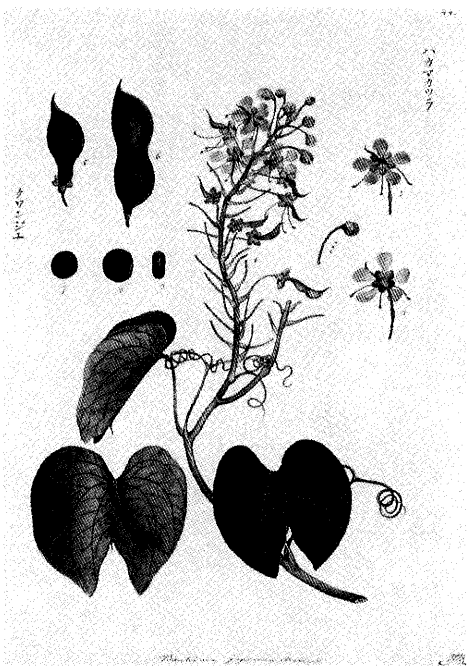
図版17.「ハラン」805（24.2×33.7cm）



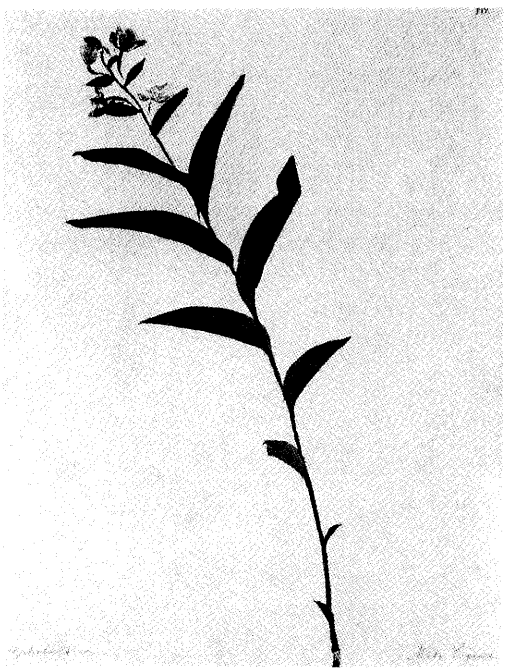
図版18.「ショウキラン」924（23.5×33.6cm）



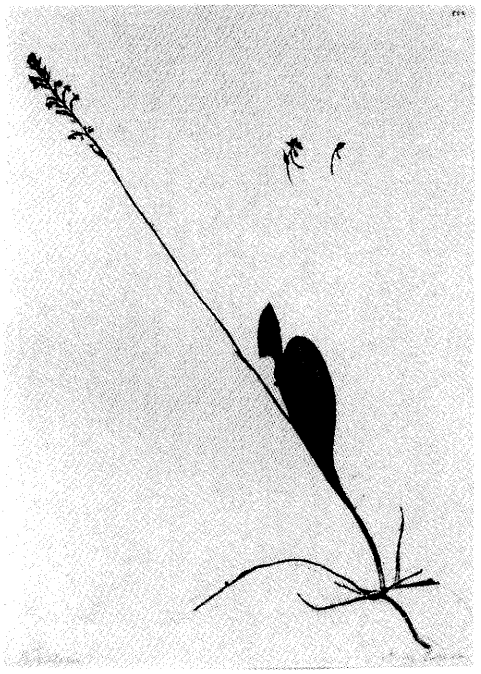
図版19.「ニガキ」508（23.3×32.3cm）



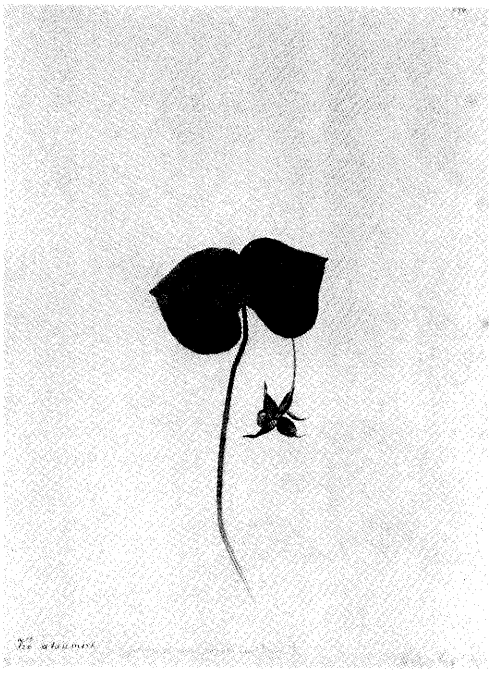
図版20.「ハカマカヅラ」444（24.0×33.0cm）



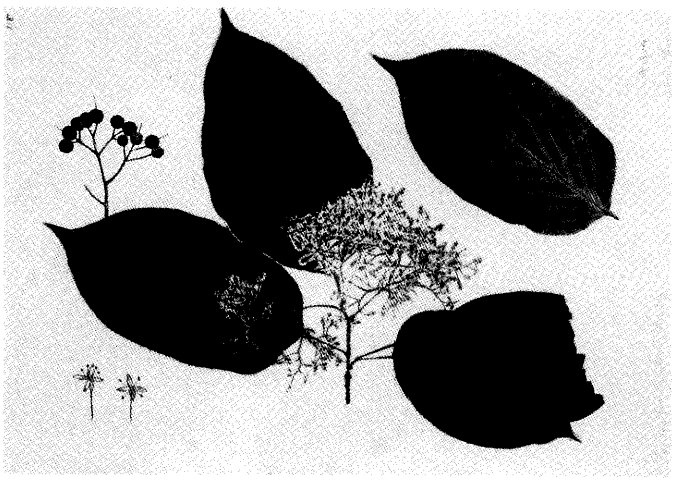
図版21.「キンラン」914（23.5×30.9cm）



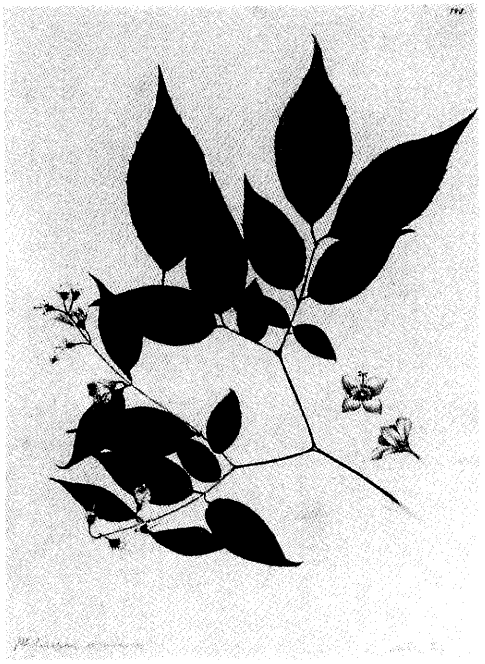
図版22.「トンボソウ」923（23.9×32.2cm）



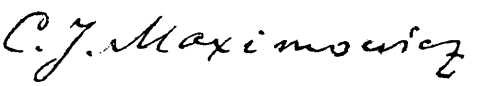
図版23.「コアツモリソウ」915（23.8×32.1cm）



図版24.「ミズキ」617（23.0×32.2cm）



図版25.「バイカウツギ」362（23.8×32.0cm）



図版26. マキシモヴィッチの署名
「札幌博物学会会報」1，1895